

教育的価値	具体の項目	教育課程
1【生きる】 2【かかわる】	②【自然との共存】 自然の恵みや美しさに感動する心と畏敬の念を持ち、自然と共に生きる ことについて考える。 ⑭【復旧・復興へのあゆみ】 震災津波で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復旧・復興の状況 を調べ、安全でいきいきしたまちづくりにかかわる。	・特別活動 ・道徳 ・総合的な 学習の時間

【題材】

単元名 「ふるさとの海と生きる」

ねらい 震災津波の様子や復興の状況を調べ、生き生きとしたまちづくりをしたいという思いをもち、ふるさとの海の美しさや豊かな恵みに気づき、ふるさとの海と共に生きようとする思いを持つ。

【対象】

全校児童（42名）

- 1・2年生・・・角浜の海、久慈の海についての学習（特別活動、道徳）
- 3・4年生・・・角浜の海、種市の海、久慈の海についての学習（特別活動、総合的な学習の時間）
- 5・6年生・・・角浜の海、野田の海についての学習（特別活動、総合的な学習の時間）

【実践の概要】

学年の発達段階に合わせ、教科やねらいを設定しながら、年間を通して復興教育「ふるさとの海と生きる」を行った。

	1 学期	2 学期	3 学期
1・2 年	磯掃除 角浜の震災を知ろう 生きる・かかわる	もぐらんぴあまちなか水族館 で調べよう	復興学習発表報告会 で学び合おう 生きる
3・4 年		種市の海について調べよう ～八戸線から見た種市の海～	
5・6 年		野田の震災の様子・復興の 様子を調べよう	

〔平成26年度 各学年の主な復興教育年間活動計画〕

【実践の詳細】

1 学期実践 磯掃除「角浜の震災を知ろう」

磯掃除とは、角浜小学校が63年間続けている伝統の行事である。角浜漁港付近の海岸に全校児童で行き、わかめや昆布を食べるツブをとったり、ごみ拾いをしたりする行事である。行事そのものが、自然の美しさに触れ、自然と共に生きる復興教育となる。

今年は、磯掃除の前に、種市漁協角浜生産部長の大村文雄さんから、角浜の海の幸についてと、東日本大震災の時の津波の様子のお話をいただいた。震災の際に、実際に漁港近くで避難活動に当たった大村さんの話は、子どもたちの胸に響き磯掃除の意味や震災の様子を考えながら、磯掃除を行うことができた。



〔磯掃除をする子どもたち〕

〔子どもたちの感想〕



〔漁協の方から震災の話を聞く子どもたち〕

7月14日に全校でいそそうじをしに角浜漁港に行きました。大村文雄さんから、しんさいの時のことを聞きました。分かったことは、船がつなみでひっくりかえったこと、12メートルのつなみがきたこと、草のところまで水がきたことです。その中でいちばんびっくりしたのは、つなみがさいだいで、17メートルの高さまであがったことです。 (3年男子)



〔真剣にツブをとる子どもたち〕

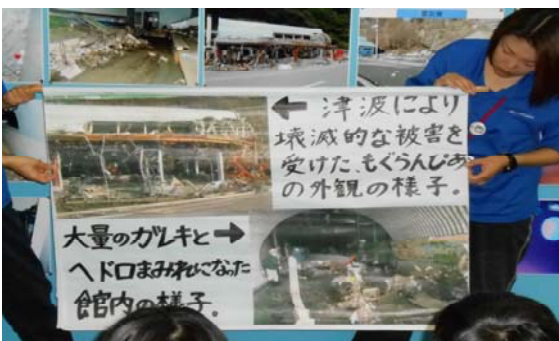
漁協の大村さんから震災のお話を聞きました。そのお話を聞いている場所のすぐ近くまで、その時津波が来ていたと思ったら、こわくなりました。大村さんと消防の方々は、危なくても海に行って津波の写真を撮ったり、記録をしたりしていることも分かりました。津波のことを忘れないようにしないといけないと思いました。ですが、普段の海は、とてもきれいで、遊んでいても楽しいし、ウニやアワビなどの海産物もたくさんあるよいところです。だから、これからも海を大切にしていきたいと思います。 (6年女子)

2 学期実践 復興教育校外学習「種市・久慈・野田の震災を知ろう」

2 学期は、各学年の発達段階に合わせて、近隣の市町村の震災の様子や復興の様子を調べた。

1・2年生 「もぐらんぴあまちなか水族館で調べよう」

低学年は、久慈市のもぐらんぴあまちなか水族館に行き、魚とふれあうと共に、水族館の方から旧もぐらんぴあの被災の様子についてのお話をいただいた。



〔被災の様子を説明して下さる水族館の方〕



〔真剣に聞き入る子どもたち〕

しんさいの時の話をきいて、すいぞくかんの人のお仕事がますますたいへんなのがわかりました。しんさいの時、もぐらんぴあがめちゃめちゃだったのに、2ひきのかめがじぶんでもどってきたのがすごいと思いました。わたしだったら、もう死んでいると思います。かめの力はすごいと思いました。(2年女子)

〔子どもの日記より〕

3・4年生 「種市の海について調べよう～八戸線から見た種市の海～」

中学年は、低学年と一緒にまちなか水族館を見学した後、JR八戸線に乗り、種市の海岸線を見てきた。子どもたちは、事前に、種市の震災の様子を資料や洋野町作成のDVD等で学習している。写真や映像で学んだ海の、現在の様子を見、地元出身の本校校長の解説を聞き、わが町種市の震災時の様子に思いをはせながら、復興が進んだ現在の様子を見学した。



〔車窓から見える種市の海と子どもの感想〕

ぼくが八戸線に乗って電車から見たけしきは、前に勉強した写真とはぜんぜんちがいました。津波がおきた時の写真は建物がほとんどなくなっていました。でも、電車から見た海は、きれいだったです。建物もいっぱいありました。前と今でぜんぜんちがいました。

(4年男子)

〔種市の被災を学習しての子どもの感想〕

わたしは、「東日本大しんさい大つ波のきろく」というDVDを見ました。そのDVDに、種市の様子のえいぞうがありました。そしたら、海浜公園のぼうちょうていがうまるくらいの波が来ていたので、びっくりしました。だけど、今の種市は、きれいな海になっているのでよかったです。(3年女子)

〔1・2学期の復興教育で学んだこと〕

1・2学期の勉強で分かったことは、津波の高さが12メートルくらいだったことです。12メートルは家の高さくらいだから、すごく高いので、こんな津波が洋野町にも来たんだと思いました。私の家は海の近くではないけど、もしも、海の近くにいる時は、すぐに高い所に逃げるよう気をつけたいです。この勉強をして、私は津波でどんなふうになっていたか、その時のことを思い出して学習できました。電車で学校に行けなくなった人たちのことを考えられるようにします。

(4年女子)

5・6年生 「野田村の震災の様子・復興の様子を調べよう」

高学年は、県北沿岸地域で一番被害の大きかった野田村の震災の様子・復興の様子について調べた。

まずは、野田村役場に行き、総務課の小谷地英正さんから、野田村の被災の様子を資料をもとに教えていただいた。子どもたちは、想像以上の被害の大きさに、びっくりしながら、真剣に話を聞いた。その後、十府ヶ浦の海岸から、実際に建設途中の防潮堤を見ながら、復興に向かう野田村について説明を聞いた。倒れている石碑を見たり、小高い山の上の木が倒れているのを見たりして、被害の大きさを実感した。

その後、野田中学校応急仮設住宅に行き、自治会長の中野大六さんから仮設住宅の様子を見せていただいた。きれいな住宅ではあったが、冬になると寒そうであること、狭いことにびっくりしていた。

その後、自分たちにできることとして子どもたちが考えた「郷土芸能 角浜駒踊り」の披露を行った。当日は、子どもたちの思いに賛同して下さった角浜地域の「駒踊り保存会」の方10名の生演奏で、仮設住宅前で踊ることができた。踊り終わってから、仮設に住む方にインタビューしたり、肩もみをしたりしてお話を聞くこともできた。

子どもたちなりに、震災の甚大な被害を痛感し、被災者と直接話ができる貴重な体験となった。



〔十府ヶ浦で説明を聞く子どもたち〕

〔子どもの作文より〕



〔仮設住宅前で駒踊りの披露〕



〔インタビューの様子〕

野田の震災の様子について勉強しました。まず役場の方から村の被災の状況などの説明を受けました。続いて十府ヶ浦に移動し、海岸と防潮堤建設の様子を見てきました。十府ヶ浦では、木が倒れていたり、水門の高い所などまだ直していないところもありました。あんなに高い所まで津波が来たら、飲み込まれてしまっていたと思うと恐ろしくなりました。

次に野田中仮設に行って空いている部屋を見学した後、角浜駒踊りを一生懸命踊りました。その後、被害にあった方にインタビューもしてきました。笑顔で答えてくれましたが、本当はつらい思いだったのかもしれない。仮設住宅に入った時は、冬になると寒そうな感じでした。仮設に暮らす方から聞いた震災の経験を忘れず、もし、津波が来たら、すぐ高台に逃げるようにしたいと思います。（6年女子）

3 学期実践 復興学習発表報告会で学び合おう

3 学期には、全校児童が一同に介して、各学年で復興について学んだことの発表報告会を行う。報告会を行うことで、各学年が相手意識・目的意識を持ちながら、見たこと聞いたことを整理し、自分の考えをまとめることができる。また、他学年から学ぶことも多い。さらに、発表会の後半では、海で仕事をし海のよさをよく知っている大人を、ゲストティーチャーとして招き、「海の恵みや美しさ、ふるさとのすばらしさ」について、講演していただく予定である。

この「復興学習発表報告会」を通して、震災の様子を理解しながらも、海のよさやふるさとのよさを実感させたいと考える。

【まとめ】

本実践の大きな成果は、1年から6年まで全校児童で同じねらいの復興教育に取り組んだことにある。発達段階によって違いはあるものの、どの子ども、東日本大震災の状況について学び、ふるさとのよさ・大切さを再認識した。3月には、この1年間の実践を、写真と子どもの感想中心に冊子にまとめ、保護者に配付するつもりである。子どもたちが、何について学び、何を考えたか、家庭でもわかってほしいと考える。そして、復興教育の大きなねらいである、ふるさとの未来を担う子どもの育成に、一歩でも近づければと考えている。

最後に、岩手日報 平成26年12月13日の「つなみてんでんこ」に掲載された本校児童の記事を紹介して、本実践の報告のまとめとする。

